

監修者あとがき

細菌やカビなどの微生物から人間に至るまで、すべての生き物は細胞からできており、細胞の働きは遺伝子が司っています。遺伝子は、デオキシリボ核酸（DNA）からできていますが、著者のアーサー・コーンバーグ博士は、DNAの複製を行う酵素を発見し、1959年度のノーベル医学・生理学賞を受賞した20世紀を代表する生化学者です。基礎研究を大事にし、オープンな環境と研究者の独創性を尊重するコーンバーグ博士の一貫した姿勢により、スタンフォード大学は遺伝子工学とバイオテクノロジー産業を生み出すメッカとなりました。

博士は、やはり研究者だったシルヴィ夫人との多忙な研究生活のかたわらで、まだ幼かった3人の息子、ロジャー、トム、ケンに、自分たちが研究している魅力的で、人々に役立つ目に見えない微生物について語りかけました。父の話を聞いて育った息子たちは立派に成長し、長男のロジャーは、RNA合成の研究で2006年度のノーベル化学賞を受賞し、次男のトムは、ジュリアード音楽院でチェロの演奏を修行した後、シヨウジョウバエの発生学における第一級の分子生物学者として活躍しています。三男のケンは、著名な建築家として世界各国の研究所を設計し、現在、沖縄科学技術大学院大学（OIST：仮称）のデザインも手がけています。私と妻はコーンバーグ博士の薫陶を受け、30年にわたり博士のご家族とも親しく交流させていただき、個人の独創性を育む家庭環境が作られ

る過程を目撃してきました。本書は、コーンバーグ博士が若い息子たちに話しかけたように、50年の歳月を経て祖父となった博士が、8人の孫、ギリ、ガイ、ジェシカ、マヤ、ロス、ソフィー、ザック、ゾーイたちに向かって話しかける短い物語からなっています。話の主人公は、やはり目に見えない微生物ですが、ヒトの胃に住みつくピロリ菌や、細菌を食べる粘液細菌、エイズについてもふれられています。

コーンバーグ博士は文章の達人であり、これまでに多くの簡潔で印象的なエッセイと3冊の著作をまとめられましたが、本書を執筆した後、2007年10月に89歳の生涯を閉じられました。本書の翻訳者の宮島郁子博士は、コーンバーグ博士の設立したDNAX研究所で長年にわたり仕事をした研究者でもあります。

本書を通して、読者のみなさんは、科学を愛し、芸術を愛し、人間を愛し、そして何よりも家族を大切にしたいコーンバーグ博士の暖かい人柄にふれることができるでしょう。21世紀は生命科学の時代といわれますが、その扉を開いたコーンバーグ博士の文字通り最後の著作となった本書を、子供たちはもとより、大人の世代の方々に強く推薦します。

2008年5月

東京大学名誉教授
新井賢一



（左から）トム、アーサー、ロジャー・コーンバーグ博士



座長：新井賢一博士

2007年7月23日に東京大学安田講堂で行われたシンポジウム「独創的研究の神髄：コーンバーグ親子から学ぶ」では、アーサー・コーンバーグ博士とそのご子息がそれぞれの研究について講演を行いました（撮影：多羽田哲也博士）